祐子三歳　独立のイメージ
――私、おねえちゃんです――

小薗江　幸子

私達夫婦にとっての第二子が一昨年の十二月三十日に誕生しました。長女の祐子が一月二日生まれですので、ちょうど三歳違いの姉弟ということになります。私のお腹がふくらみ始めたのが、ちょうど祐子が二歳半頃のことです。祐子の時と同様、子宮口の筋無力症のために、五か月の時に縫縮の手術をしましたから、出産まで安静が必要で、祐子を抱き上げたり、一緒に走ったりとんだりすることはできませんでした。散歩や買物の帰り道、歩きつかれて、「どうしてお母さんはだっこやおんぶをしてくれなくなったの？」と言われ、「ポンポの赤ちゃんが元気に生まれてくるように大事〳〵しないといけないのよ。」と説明しましたが、二歳半を過ぎているのに、ついついベビーカーに頼ってしまったことも事

実でした。

ただ、お腹の赤ちゃんの存在が、祐子の望み（だっこしてほしい、かけっこしてほしい）を、直接制限しているのだという印象を与えることは避けたかったので、「赤ちゃんは、祐子の三歳の誕生日のあとにすぐ生まれるのよ。生まれたら、すきなだけ、だっこもおんぶもピョンピョンもできるのよ。楽しみね。」と、弟妹の誕生をプラスのイメージとして持てるように気をつけてきました。

その年のクリスマスのプレゼントは、『うさこのサンタクロース』（作・矢崎節夫）という、我家のタイミングにぴったりかなった絵本をみつけてきて読みきかせたのですが、祐子はあまりパッとしない顔で聞いており、「あまりおもしろくない」と申しましたのには、がっかりしました。うさぎの女の子が、クリスマスプレゼントに赤ちゃんがほしいとサンタさんにお願いするのですが、動物のサンタさん全員の知恵をあわせても願いをかなえてあげることができずに困っているところへ、女の子のお母さんが、「もう少し待っていらっしゃい、じきにプレゼントできるのよ」ということで解決するすてきなお話なのです。三歳直前の祐子にとって、「赤ちゃんが生まれると嬉しい」というような感情は、想像できなかったのかもしれません。実は、私自身も、第一子の祐子が胎内にいるうちは、赤ちゃんがかわいいという感情をなかなか持つことができず、「自分には母性愛が欠如しているのではないか、はたして母親になる資質が備わっているだろうか」と不安だったことが思いおこされます。出産して、新生児と対面し、腕に抱いて、乳を飲ませて、笑顔がみられるようになってやっとかわいいと思えるようになった自分自身の母親としての成長のゆっくりさを思うとき、祐子が、姉になることを良く理解できない、というより想像できなかったとしても、無理のないことだったかもしれません。祐子は、時おり、知人に、「もうすぐお姉さんになるのね、いいわ

ね、うれしいでしょう？　とたずねられても、全く困りきった表情をし、お返事ができないのでした。

出産前に、これだけはわかっておいてもらいたいと、真剣に彼女に語り聞かせておいたことがあります。それは、

「赤ちゃんが生まれて、よその人が、どんなに『かわいい赤ちゃんね、赤ちゃんかわいい、かわいい』なんて言っても、祐子は、ずっとずっとお父さんとお母さんの宝物で、赤ちゃんの方が、祐子よりかわいくなっちゃうということはないのよ。だから心配にならないようにね。」ということです。これについては、「よくわかった。」と、納得した様子でした。

さて、祐子の三歳の誕生日がすぎてから、プレゼントとして生まれるはずだった第二子は、予定よりも一週間早く、十二月三十日の朝、超安産で生まれました。二十九日の夜、絵本を読みきかせられながら眠ったはずの祐子は、次の日の朝には、母親は病院に行ってしまっており、父親と朝飯を食べて、母に面会に来たときには、すでにお姉さんになっていたという訳です。

産後の五日間の私の入院期間を、祐子は、毎日病院に面会に来ることを楽しみに父親とすごしたということです。毎日の忙しい生活の中で、意識的に祐子とかかわりを持ち、細かい世話も、ほとんど何でもできるという父親の日ごろの努力が、祐子にそれほどきびしい思いをさせずに、すごすことができ、無事退院の日をむかえることができました。

退院の日、晴れ〳〵とした表情で祐子は母親と手をつなぎ、新生児の章博は、父親にだっこされて帰宅しました。その父親が、章博をだっこしたまま、家にはいろうとした時、祐子は、

「赤ちゃんのお母さんは誰なの。赤ちゃんのお父さんは祐子のお父さんなの？」とたずねたそうです。父親は、とっさにどう答えたものか迷ったそうですが、「そのとおりだよ。とてもよくわかった

ね。」と言ったそうです。今まで、ひとり娘として、父母の愛情を独占してきた祐子にとって、弟と、父母の愛情を分け合っていかねばならないらしいという考えが、赤ん坊を目のあたりにして初めて現実のものとなってきたようです。

章博を加えての新生活が、いよいよ始まりました。産後の私にとって、章博の授乳とオムツ、祐子の世話と最低限の家事をするのが精一杯でした。産後の手伝いに来てくれていた私の母が、後日談で、産後の私が「祐子を抱っこしてやることが少なくて心配になった。そのかわりに、祐子の父親は帰宅するなり祐子をだきあげ、体を動かして一緒に遊ぶように努めていたのが印象的だった。」というのです。私としては、退院して以来、まず、妊娠前の母親の姿にもどろうと努めていたつもりでしたので、そのことばはとても意外でした。努めているつもりでも、やはり赤ん坊に手も心もとられてしまっていたのだと思います。

幸いなことに、祐子が眠りにつく時刻と、章博の授乳の時間が重ならなかったので、毎晩、祐子の好きな絵本の読みきかせだけは続けることができました。その時間は、章博を父親の手に委ね、祐子だけの母親として眠りにつくまでの時間をすごしました。一階の居間に弟と父親を残して、二階の寝間まで母親の手を引っ張っていく時の祐子の満足そうな表情は、私にとっても嬉しいものでした。

二人の子どもを育てる上で、私が考えたことと言えば、祐子に、弟が生まれたことで、淋しい思いをしたり、つらい思いをさせることをできるだけ少なくしたいということだけです。弟が生まれたということが、嬉しい印象、快い印象に結びついていけば、弟をかわいがる気持ちも育っていくのではないかと期待しました。従って、「お姉さん」ということばは、肯定的イメージを与える時だけ使う、つまり、「お姉さんだから、〇〇せねばならない、我慢すべし。」というような時は使わないようにし、「お

姉さんだからできたのね、さすがにお姉さんは我慢強いのね。」という具合です。このことについては両親の間ではほぼ合意がありましたが、それ以外の親戚やら知人からは別のことばかけも多々あります。しかし、両親と過ごす時間が長いですから影響はほとんどないように思います。

また、章博をあやしたり、抱いたりする時はできるだけ祐子もともに関わって、ともにかわいさを楽しむようにしていました。生まれた時から、両親の愛情と注目を独占してきた祐子にくらべ、第二子の章博はなんと不憫だろうという気持ちがないわけではありません。けれどもこれが第二子のさけて通れない現実ならば、姉からの愛情も受けられるようにもっていけば、少しは補いもつくのではないかと割り切らざるを得なかったのです。四月からは、祐子の三年保育への入園も決まっていましたから、それ以降は、章博と私だけの時間を持つこともでき、濃密な母子関係づくりはそれから埋め合わせて補っていこうというわけです。

祐子が、四月から幼稚園に通いはじめ、章博も生後三か月と過ぎて、よく声をたてて笑ったり、はしゃぐような表情もみえるようになりました。初め

ての園生活で、それなりに緊張もあったろうと思うのですが、章博をベビーカーにのせて迎えにいきますと、祐子は通園路の途中から自分もベビーカーにのりこんで章博を自分のほうにむかせ、「イナイイ〳〵バァ」と繰り返しやってみせながら、章博をあやして笑わせようとしているのでした。あたかも章博を笑わせることで自分がくつろげる、ホッとした気分になれるという風でした。祐子は、自分が乳児の時に最も好きだったイナイイナイバァを、章博に対してもよく使います。それと「おねえちゃんよ、おねえちゃんよ。」と「おねえちゃん」ということばを繰り返し耳から聞かせて、教えこみます。「おねえちゃん！」といつか言ってくれるのがとても楽しみなのだそうです。私としては、姉弟は上下の関係をつけずに、ユウコちゃん、アキちゃんとでも平等に名前で呼び合うように育てていきたいと思っていたのですが、祐子としては、ぜひとも「おねえちゃん」と呼んでもらいたいのだそうです。祐子に、章博の世話を手伝ってもらう間は、それも仕方のないことのようにも思います。

章博の表情が豊かになってきて愛らしさも増してきた夏頃、こんなこともありました。私が章博と向き合って「イナイ〳〵バァ」と遊び、「おいでおいで」と手まねきをしているのを見て、祐子は、「私のことはもうかわいくないの？」

また、同じ頃、私のひざの上にどしんと乗っかってきた祐子に「わあ、重い、痛かったなあ。」と悲鳴をあげると、祐子は、「祐ちゃんがあまり大きくなったから、もうだっこはしてもらえないの？」あまりの悲しそうな顔に、胸がつかれるものを覚えました。

兄弟げんかの芽も、章博が七か月すぎて両手が自由に使えるようになってきた頃から見られるようになりました。「これはおねえちゃんのだいじなものよ。さわっちゃだめ！」「おねえちゃんのこと大好きだからおねえちゃんのものをさわってみたいんだ

よね。」そこで祐子は別のおもちゃを章博の手にもたせて気をそらせることを覚えたり、章博にじゃまされたくない遊びをするときは、二階に行ってやるか、台所のダイニングテーブルの上ですることにして、無用のトラブルはできるだけ少なくしたいとは思っているのですが…。

また、章博が十か月をすぎ、よく歩きまわるようになると、祐子は、私とは違ったやり方で、弟と遊ぶようにもなりました。章博が何か嬉しそうな顔、楽しそうな表情をしたとき、祐子は章博に顔を寄せるようにして、ニコニコと笑ってみせます。すると章博も負けずにニコニコと笑い返すのです。次に祐子が声をたててケタケタという風に笑ってみせると、章博も全く同じようにケタケタと嬉しそうに笑うのです。そのように他愛のないことを何度もくり返して、まるで気持ちが通じあうことを確かめてでもいる様子です。章博の歩行がよくできるようになってくると、テーブル等のまわりを、笑い声をあげながら、ぐるぐるまわる遊びが、もっとも興にのったようでした。ちょうど二歳位の時、祐子は公園で出会った同年齢の子どもと、友だちになれそうだなと感じた時には、相手と同じ動作をしたり、おいかけて歩いて、気持ちをつなげることを体で覚えたという話を、一年前に本誌に書かせていただきました。今、このようなやり方で、小さい弟と心をつなげる遊びをしてみせてくれる祐子をみていると、あの頃、公園で、少し年上のお友だちから関わってもらった仕方、友だちになり方、心のつなげ方の技術といってもよいようなものが、祐子の人間関係づくりにとって、大変にすばらしい財産になっているのだということを、再確認させられています。

「章博がもう少しおにいちゃんになったら、絵本をたくさん読んであげるからね。」小さい時に自分が好きだったことを、今度は弟にしてやれるということが、祐子には楽しみでたまらない様子です。弟が生まれるまでの三年間は、両親の愛情を一身にう

けるだけですごし、公園での出会いでも、ちょっと年齢の多いお友だちにかかわってもらって、心をつなげるようになってこられた祐子が、今、四歳を目前にして、弟の章博に、子どもと子どもの心のつなげ方を伝えている―。人間の営みというのはなんてすばらしいのでしょう。幼い者たちのこのような姿を見せてもらいながらすごせることを、保育にあたる母親として至上の幸福だと思っています。

祐子の幼稚園生活についてあまりふれることができませんでしたが、たいへん温かく子ども達の育みを助け、見守ってくださる先生方と園長先生が、まさに思いやりと意欲を大切に、園生活をすすめてくださっていることを忘れてはいけないと思います。

この一年間、祐子は四歳児として、幼稚園での生活も充実し、いろいろな面で、やってみたいこともたくさん出てくるのではないかと思います。ピアノや、バレエや水泳にと、忙しく習い事に通うお友だちもふえることでしょう。しかし、私は、できることなら、低いレベルでいいから、家族のもっている文化的な内容や技術を出しあって、家庭の文化面を家族でつくっていくような楽しみ方ができたらいいと思っています。しかし、机上の空論でしかありません。

ともかく、小さい章博が我家に来てくれたことで、こんなに祐子もおとなも豊かに育ってきたことを感謝してペンをおきたいと思います。

（はるにれの会）